



2013年7月31日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(9) 小建中湯 (しょうけんちゅうとう)

この処方のキーワードは「虚劳裏急」。

弁証のキーワードは①気血不足、②胃腸過敏、③腹皮拘急です。

(どんな処方か?)

小建中湯の建中とは中焦脾胃を建立し、脾胃で生じる気血を充足させる薬という意味で命名されたものです。

この処方では脾胃虚弱が原因で陰陽気血すべてが不足した虚劳と謂われる状態に陥った人が、引き攣るような腹痛、動悸、四肢疼痛、鼻血、夜尿、夢精、或は寒熱錯雑などと言った種々の症状を現すのを治療する処方です。

五臓の中で肝は脾を制御する相剋という関係にあります。脾胃は気血生成の源ですから、脾が虚弱な人は脾と最も近い位置にある肝の血も不足します。肝血が不足すると肝気が不安定になって、肝は相克関係にある脾の虚弱を善いことに必要以上に脾に干渉する結果、肝乗脾虚という現象が起こり脾は痙攣性の腹痛を起します。

小建中湯は胃腸虚弱で元気が無く、顔色も悪く、神経質で怒りっぽい上に様々不定な訴えが有るような人に良く用います。脈は大方細弱で気血不足を現していますが肝気の鬱結や昂りのため弦脈を呈す場合もあります。舌質は淡で舌苔は白です。腹診すると腹部は一体に軟弱で深い処で腹直筋が敏感に緊張している人が一般的ですが、中には腹全体がベニ

ヤ板のように薄くて突っ張った人もいます。また特に子供などでは一寸触れただけで、くすぐったがって腹診できない場合がありますが、これなどは典型的な**小建中湯**の腹証です。

(小建中湯の原典)

小建中湯は『傷寒論』及び『金匱要略』に出ています。

『傷寒論』では「傷寒、陽脉濇、陰脉弦ナラバ法ハマサニ腹中急痛スベシ、先ズ**小建中湯**ヲ与エ、差エザル者ハ**小柴胡湯**之ヲ主ル」(太陽病中篇 第100条)

虚弱体質で脾即ち胃腸の弱い人が少陽病に罹った場合には先ず**小建中湯**を投与してみよと言うものです。「陽脉濇、陰脉弦」という脉は脾の気血不足を現しています。

前の**小柴胡湯**の項で申した通り、少陽病では肝胆の疏泄が失調して肝気鬱結が生じるので、脾が弱い人では直ちに相剋関係にある脾に影響が及んで「腹中急痛」という脾の症状を生じるのです。この場合**小建中湯**で脾の不足を補ってやれば良いと言う意味です。

「傷寒2、3日、心中悸シテ煩スル者ハ**小建中湯**之ヲ主ル」(同前 第102条)

太陽病に罹り動悸とイライラを感じる人は気血が不足している証拠だから、先ず**小建中湯**で中焦の脾胃を建て直し気血の虚を補えば治るという意味です。「悸シテ煩ス」とある悸は心気虚、煩は心血虚に因る症状です。

『金匱要略』では「虚劳裏急。悸、衄、腹中痛ミ、夢ニ失精シ、四肢痠痛シ、手足煩熱シ、咽乾口燥スルハ**小建中湯**之ヲ主ル」(血痺虚劳篇 第6-15)とあります。

この条は陰陽両虚して寒熱が錯雑する虚劳の証を述べたものです。陽が虚せば寒を生じ、陰が虚せば熱を生じます。動悸は心気が不足しているからです。衄血、手足煩熱、咽乾口燥は陰虚内熱に因るものです。裏急、腹中痛はここでは陽虚裏寒に因る症状です。陰陽が俱に虚せば気血も俱に虚すので、筋肉を滋養できなくなって四肢の倦さや痛みを生じます。夢で失精とは夢精で腎の陰陽が俱に不足して腎陽が精を固摂できなくなる結果です。

このような陰陽両虚に因る寒熱錯雑は温薬で寒を補せば陰を損傷し、或は寒薬で熱を治せば陽気が損なわれます。この様な時は甘温の薬を主にして陽を補い、酸甘の薬を以て陰を益せば始めて能く陰陽を俱に補って平調できると古典は教えています。**小建中湯**は甘い膠飴を君薬にして気血生化の源である脾胃を再建確立し、酸味の芍薬で血を養って気血の充足を計れば、陰陽の不足は自ずと解消すると教えているものです。

「男子黄ニシテ小便自利ナルハマサニ虚劳タリ、**小建中湯**ヲ与ウベシ」(黄疸病篇 第15-22)

虚劳病からくる皮膚の黄染は痿黄で、湿熱が内に閉じ込められて起こる通常の黄疸とは別物です。痿黄には湿の鬱滞に因る尿不利は無く、逆に尿はよく出ます。痿黄は**小建中湯**で中焦脾胃の気血を補い虚劳を治療してやれば治る、と言うものです。

「婦人腹中痛ムハ**小建中湯**之ヲ主ル」(婦人雑病篇 第22-18)

女性の腹痛は男性の腹痛よりも原因が多様多彩ですが、本条は女性に多い虚寒に因る裏急を指していて、**小建中湯**で補虚緩急してやれば良い、というものです。

以上の条文を通読すれば、**小建中湯**がどういう症状を現すヒトや場合に用いられるか、即ちその薬証は大體理解して頂けると思います。

(小建中湯の処方構成)

小建中湯は桂枝、芍薬、甘草、大棗、生姜、膠飴の6種類の生薬から構成されています。これは「衆方の祖」と呼ばれて『傷寒論』の冒頭に出ている**桂枝湯**の芍薬を倍量にした上、甘温の膠飴を加えたもので、温中補虚を主眼とした処方です。

先ず君薬は膠飴です。これは米を蒸した後麦芽を作用させて作った飴で、性味は甘温、脾虚を温補すると共に急迫を緩和して痛みや痙攣を止める働きが顕著です。原典では1升用いよとあり、現在の処方では20～30グラムの大量用いています。臣薬は炙った甘草で性味は甘温、膠飴・桂枝を助けて脾を温補し甘味を以て陰陽を双補します。佐薬は辛甘温の桂枝と酸苦微寒の白芍薬です。桂枝は陽気を温通し、白芍薬は肝血を補って肝気を収め、肝乗脾虚に因る腹痛を緩和します。使薬は辛温の生姜と甘温の大棗です。両薬協力して脾胃を温め補い気血生成の源の働きを強化します。

これら諸薬の協力に因り処方全体では、温中補虚・和裏緩急の効果が得られ脾胃の働きを健全になすので、陰陽気血は皆充足され、これらの不足に因って生じていた諸証は自然に消失する、というわけです。

(小建中湯の臨床応用)

小建中湯は原典に先ず「虚劳裏急ハ**小建中湯**之ヲ主ル」とあるように、脾胃を建立再建して陰陽気血の不足を解消し、先ず肝乗脾虚に因る腹痛を治し、併せて虚劳が原因になって起こる多種多様な諸証を治す処方です。これを念頭に置いて臨床応用を考えると、応用範囲は非常に広がってきます。先ず虚証の人の胃腸のトラブル、消化機能失調症、過敏性腸症候群、場合によっては潰瘍性大腸炎やクローン病などの症状軽減にも有効です。幼少児の虚弱体質、ある種の登校拒否なども改善します。

次に**小建中湯**の加減方、或は類似した処方を挙げると、

黄耆建中湯は益気昇陽の黄耆1味を加え、「諸不足ハ黄耆建中湯之ヲ主ル」とあり**小建中湯**より補気の効果を強めています。

当归建中湯は当归1味を加え補血の効果を強化し、**帰耆建中湯**は黄耆にさらに当归を加えた処方で気血双補の作用を強化しています。

大建中湯は陽虚裏寒のため心胸痛・腹痛・嘔で腸の蠕動亢進や麻痺などが見られる者に用いられる処方です。

桂枝加芍薬湯は膠飴を抜いた処方で**小建中湯**証よりは虚が軽く痙攣性の腹痛だけが著しい場合に用います。

桂枝加芍薬大黄湯は虚証で大腸痙攣性の腹痛に便秘を伴う場合用います。